

ボストン美術館所蔵「平治物語絵巻」〈三条殿夜討巻〉再考

金井裕子（東京国立博物館）

合戦絵巻の白眉「平治物語絵巻」は、卷子三巻と断簡数葉のみが現存し、二巻分の模本が別に伝わる。その制作状況について、先行研究による主な指摘は以下の五点に集約できる；①鎧などの装束形式などから制作時期は十三世紀半ば、十三世紀後半、十四世紀前半の三期に分かれる。②彩色は二者以上の手による。③詞書は一筆である。④詞書執筆の後に彩色されている。⑤制作途中での作図変更の跡が残る。これらを踏まえ、制作時期は現在十三世紀半ばから十四世紀前半と広く設定されている。発表者は、アメリカ・ボストン美術館蔵〈三条殿夜討巻〉の作図変更箇所注目し、下描き墨線（仮に下絵と称す）の図像を整理することで、制作年代についての再検討を試みたい。

本図の最も大きな変更箇所は第六紙から第八紙、燃え盛る三条殿の場面を切断し新たな料紙を挿入、濃彩の〈後白河院拉致〉の場面を追加した部分である。秋山光和氏はこれを画家による創意工夫による変更と解するが、下絵と変更後の濃彩絵の画風を検証すると両者には差異が認められることから、本場面は下絵完成後、後年に挿入されたものと考えられる。これは同時に、〈三条殿夜討巻〉における時間推移の表現が、後に追加されたものであったことを示す。このような作図変更と追加描写は、画家の創意工夫の範疇を超えるものと推察できることから、注文主もしくは所有者の意向によるものであろう。

また本図の画風を改めて精査したところ、画家は主に三つの系統（仮にA・B・Cとする）に分類でき、これらは①で指摘されていた風俗上の差異とも一致することが明らかになった。当初の下絵を手がけた画家Aは、細く伸びやかな線描を用い、的確な描写力を持ち、構図の破綻も少ない。対する画家Bおよび画家Cは、対象の構造把握が不完全で不自然さが散見され、特にCは一部稚拙ともいえる表現が随所に確認できる。またAの下絵線は重複や描き直しが見られず、十分に構図を練り上げた上での清書描きと想定でき、BやAの上から、CはAとBの描写を避けて描いている。よって本図は、Aの下絵の上からBが構図を変更・加筆・彩色を行い、さらにCが後年余白に加筆を行ったと考えられる。

本図の制作過程においては、白描下絵の制作期という第一期、彩色および改変期という第二期、余白にさらなる加筆を行う第三期の、大きく三つの時期を想定する必要がある。発表者はそれぞれをひとまず十三世紀半ば、十三世紀後半、十四世紀半ばと想定したい。今後は詞書の執筆時期や、「平治物語絵巻」の他巻、ひいては同時代の他作品の様式検討を進め、これらの重層的な制作過程についてさらに考察を深めることで、制作背景などについても検証していく予定である。